

ドイツ歌曲に対する抵抗感を低減する授業の提案： 子音の発音を重視したトレーニングに着目して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-21 キーワード (Ja): ドイツ歌曲 キーワード (En): German lied 作成者: 馬場, 由香, 今岡, 多恵, Baba, Yuka, Imaoka, Tae メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/703

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ドイツ歌曲に対する抵抗感を低減する授業の提案

―子音の発音を重視したトレーニングに着目して―

Proposal of a lesson to reduce resistance to German lied
: Focusing on training of consonant pronunciation

馬場由香 今岡多恵

Yuka Baba, Tae Imaoka

1 はじめに

著者が担当する「ドイツ歌曲研究2」の授業において、ドイツ歌曲に対して抵抗感を持っている学生が見受けられる。この抵抗感を持つ大きな要因としてドイツ語の子音における発音の習得が関係していることが考えられる。著者が担当する個別レッスンにおいて、「発音の仕方が難しい」「子音をどのように際立たせたら良いかわからない」という声を学生から多く聞く。事実、著者がドイツ留学をした際に、指導教員から子音の発音の仕方について何度も指摘を受けた。その度に子音を意識して発音したが、ドイツ人の耳にはその発音が届かず、詩を聴かせるようにドイツ歌曲を歌うことの困難さを痛感したことがある。こうした経験から著者は、個別レッスンの指導において子音の発音のトレーニングを実施している。そのトレーニングを実施した学生は、子音の発音が良くなるのみならず、母音の発音も良好となり、さらには詩の解釈を積極的に取り組むようになるなど様々な面において大きな効果をもたらしている。

なぜ、ドイツ歌曲を歌う際に、子音の発音が重要なのだろうか。三ヶ尻(1998)は、子音の重要性について次のように指摘している。

音楽や演劇の舞台では子音を明確に聞かせることがきわめて重要です。舞台から客席に意味を伝え、せりふや歌詞を通じて表現するためには、まず言葉をハッキリ聞かせなくてはなりません、その際ある単語を他のことばから際立たせて聞かすことができるのは、母音よりも子音の役割です。オーケストラの音にもかき消されずに客先に声を届け、またピアノシモでも大ホールの後ろの席まで意味とニュアンスを伝えるには明瞭で的確な子音の発音が欠かせません。(三ヶ尻, 同前: 74)

同様に應和(1991)は「子音は、短時間で正確に正しいタイミングでかつその安定のために、後に続く母音の音程で発音する必要がある」(p.2)と指摘している。しかし、「日本人は、子音がほかの国のひとより弱くなりがち」(三ヶ尻, 同前: 74)である。その大きな要因として日本語の特徴があげられる。應和(同前)は「基本的に日本語は、母音だけあるいは子音と母音の結びつきによって構成されている」(p.3)と指摘している。しかし、印欧語には、日本語にはない子音が多く存在する。應和(同前)は「子

音や母音を単独で取り出して発音できるようにしておく必要がある」(p.3)と述べ、さらに以下のような指摘もしている。

日本語の発音は、同じ発音であっても、他の印欧語の言葉よりも子音が柔らかく空気が流れる速さも遅く発音される傾向がある。日本人の気質や習慣から、鋭く堅い飛び出すような発音は好まれないのである。しかし、舞台語では、日本語でさえもしっかり支えられる呼吸のもとではっきり短時間で発音されなければならない。日本人は、舞台において、印欧語を母国語とする歌い手よりも、よりはっきりと発音し、より強調して発音しながら、歌う際の音楽表現をしなければならないのである（應和，同前：3）。

以上の指摘から、子音の発音をはっきり立たせて発音することは重要であることがわかる。しかし、このように子音の発音の重要性は指摘されているがその習得の困難さから、学生はドイツ歌曲に対して抵抗感を抱いてしまうと考えられる。

本研究では、こうしたドイツ歌曲に対する抵抗感を低減するために、著者が個別レッスンの指導において実施している子音の発音のトレーニングを授業の冒頭に取り入れ、授業内容を総括するためにアンケート調査を実施し、ドイツ歌曲に対する学生の取り組み方や意識の変化について考察することを目的とする。

2 ドイツ歌曲における子音の発音を重視した実践

2-1 実施時期および実施時間

2017 年 4 月から 7 月にかけて実施した。実施時間は、1 回につき 10 分程度である。

2-2 対象者

「ドイツ歌曲研究 2」を受講する 10 名を対象に実施した。対象者は、「ドイツ歌曲研究 1」を受講しており、ドイツ歌曲に対するある程度の知識がある。そのうえで「ドイツ歌曲研究 2」を受講していることから、自身のさらなるステップアップを希望していることが窺える。よって「ドイツ歌曲研究 2」を受講する 10 名は、本調査の対象者として妥当であると考えられる。

2-3 トレーニングの内容

(1) ドイツ歌曲における子音の発音を重視したトレーニングを行う上での前提条件

授業をはじめるに当たり、「間違えたらどうしよう」などのような受講生の不安感を取り除く必要がある。こうした不安と取り除くために子音のトレーニングを実施する際には、受講生全員で取り組むようにした。具体的には、著者が子音を重視した発音を実践し、その見本を見た後、受講生が全員で一緒に取り組んだ。このような取り組みを行うことにより、大勢の声の中の一つであるという安心感を持つことが可能となる。また、一人ひとりが孤立せずに済むため、受講生の「間違えたらどうしよう」という不安感を取り除くことができ、少しずつ周りを気にせず発音することが可能となる。

(2) 子音を正確に発音するためのトレーニング

① 「d」 と 「l」 の発音

ドイツ歌曲において「d」と「l」の子音を発音する単語が比較的によく見受けられる。著者がドイツ留学をした際、指導教員から発音の仕方について特に注意を受けた子音は、この二つの子音である。著者は、ドイツ留学時にシュトゥットガルト州立歌劇場に所属していたギゼラ・プファイル氏から、「d」と「l」の発音習得のために多くの指導を受けた。本授業においては、著者がドイツ留学時に受けた指導内容を参考に以下のようなトレーニングを取り入れた。「d」と「l」のトレーニングを実施するにあたり、「d」と「l」は、それのみで発音する単語はあまり散見されないため、子音のみで発音するトレーニングは行わず、「d」と「l」に母音を付けてトレーニングを行った。

はじめに手で拍子を取り、そのリズムに合わせて「di」、「da」、「do」、「la」、「li」、「lo」の言葉を3連符で発音するトレーニングを行った。具体的には、譜例1のように一音一音に「di」を付けて発音した。その後、「da」、「do」、「la」、「li」、「lo」と言葉を変えて発音した。一見すると簡単そうに見えるが、「d」と「l」を発音する際は、必ず舌を上歯と歯茎の間に当てなければ正しい発音をすることができないため、リズムを保ちながら正しい発音をすることは非常に困難である。しかし、このトレーニングをすることで、「d」と「l」の発音する際には、無意識のうちに舌を上歯と歯茎の間に当てて発音できるようになる。

次に、譜例2のように二重母音と合わせたトレーニングを実施した。子音に「ai」または「oi」を合わせた単語はドイツ歌曲において多く見受けられるため、このトレーニングを取り入れた。「dai - da dai - da dai - da…」、「lai - la lai - la lai - la…」、「doi - do doi - do doi - do…」、「loi - lo loi - lo loi - lo…」のように言葉を変えて実施した。このトレーニングを行うことにより、「d」と「l」の子音が際立つだけでなく「ai」や「oi」の発音にも注意が向くため、母音の発音も良好になる。

最後に、音域を変えたトレーニングを実施した。「d」と「l」の発音がきれいになったとしても、後に続く母音が音符にのってきれいに発音されなければ言葉の意味は伝わりにくくなってしまう。こうした点を補うために譜例3のように「da」「la」「do」「lo」の発音の音域を変えてトレーニングを実施した。このトレーニングは、子音の発音だけでなく、母音の音をきれいに保て、単語の意味を明確に伝えることや長母音の習得にも寄与するなど多くの効果が期待できると考える。



譜例1 「d」と「l」の発音のトレーニング（3連符バージョン）



譜例2 「d」と「l」の発音のトレーニング（二重母音を加えたバージョン）



譜例3 「d」と「l」の発音のトレーニング（音域を変えたバージョン）

②「sch」の発音

既述したように「音楽や演劇の舞台では子音を明確に聞かせることがきわめて重要」（三ヶ尻，同前）であるため，しっかりと子音を前に出して発音することが求められる。三ヶ尻（同前）は，「ドイツ語の歌では「前に出す」方が，よりの確な表現につながる場合が多い」（p.74）ことを指摘している。子音を前に出すとは，「子音を拍の前で鳴り終わらせて，音符の頭で楽音が鳴り出すときに母音に移るようにすること」（三ヶ尻，1998: 74）をいう。本授業においては，「子音を前に出す」ことの重要性を伝えるために摩擦音の「sch」の発音方法に着目したトレーニングを取り入れた。

はじめに受講生に普段なにげなく発音する「sch」とドイツ歌曲を歌う際における「sch」の発音の仕方の違いに気づかせることをした。日本人が普通に「sch」の発音をする際は，「シュ」と唇の形を大きく変化させず，また腹筋を使わずに発音することができる。しかし，この発音の仕方では，舞台などで客席に正確な発音として伝わることは皆無であり，詩を正確に伝えることはできない。ドイツ歌曲を歌う際における「sch」の正確な発音は，ひょっとこのお面の唇のように唇を前に突き出して窄め，腹筋を使い勢いよく発音されたものである。この違いを気づかせるために，受講生には何も指導をせずに「sch」の発音をさせた。その後，著者がドイツ歌曲で歌う際に発音する「sch」の発音を聴かせて違いを感じ取らせた。受講生に違いを感じ取らせた後，既述したような正しい「sch」の発音する際の唇の形や発音する際には腹筋を用いることを指導し，何度か繰り返し発音させ体得させた。

3 アンケート調査

3-1 実施時期

2017年7月の授業最終日に実施した。

3-2 対象者

四 「ドイツ歌曲研究2」を受講する10名を対象に実施した。

3-3 調査内容

(1) 授業を受講する前のドイツ歌曲に対する抵抗感

授業を受講する前のドイツ歌曲に対する抵抗感について，「全く抵抗がなかった（1点）」から「非常に抵抗があった（4点）」までの4件法で回答を求めた。また，選択した理由について自由記述で回答を求めた。

(2) 授業を終えた今のドイツ歌曲に対する抵抗感

授業を終えた今のドイツ歌曲に対する抵抗感について、「全く抵抗がない（1点）」から「非常に抵抗がある（4点）」までの4件法で回答を求めた。また、選択した理由について自由記述で回答を求めた。

3-4 実施方法

調査は、「ドイツ歌曲研究2」の授業の最終回（第15回）に実施した。具体的な方法は、筆者が一斉に質問紙を配付し、筆者の指示のもとで一斉に回答を得た。調査を実施する場所は、普段授業を受けている教室が用いた。質問紙調査は、無記名式で行い、調査対象者の回答の匿名性が確保されること、授業評価には一切関係ない調査であることを質問紙に明記した。また、調査対象者の権利については、質問への回答は自由意志であること、回答しなかったり回答を途中でやめたりしても不利益が生じないことを質問紙に明記した。統計処理には、SPSS（Version21）を使用した。

3-5 結果

(1) 受講前後におけるドイツ歌曲への抵抗感

授業を受講する前後におけるドイツ歌曲への抵抗感にどのような差があるか検討するため、対応のある t 検定を行った。その結果、表1に示したように受講前よりも受講後の方が抵抗感の得点が有意に低かった（ $t(9) = 3.21, p < .05$ ）。

表1 授業の受講前後におけるドイツ歌曲に対する抵抗感の平均と標準偏差

	平均（標準偏差）
受講前の抵抗感	2.80 (1.23)
受講後の抵抗感	2.00 (.94)

(2) 受講前後におけるドイツ歌曲への抵抗感についての分類とその理由

次に、授業を受講する前後におけるドイツ歌曲への抵抗感の低減が生じた理由を明らかにするため、授業を受講する前後のドイツ歌曲への抵抗感について ward 法によるクラスタ分析を行い、群ごとに抵抗感を抱く理由について整理した。その結果、3つのクラスタが得られた。第1クラスタには2名、第2クラスタには4名、第3クラスタには4名の調査対象者が含まれていた。

次に得られた3つのクラスタを独立変数、「授業を受講する前のドイツ歌曲への抵抗感」「授業を15回受講した後のドイツ歌曲への抵抗感」を従属変数とした分散分析を行った。その結果、「授業を受講する前のドイツ歌曲への抵抗感」「授業を15回受講した後のドイツ歌曲への抵抗感」ともに有意な群間差が見られた（「授業を受講する前のドイツ歌曲への抵抗感」： $F(2, 7) = 44.10$ 、「授業を15回受講した後のドイツ歌曲への抵抗感」： $F(2, 7) = 24.50$ 、ともに $p < .001$ ）。図1に3群の各得点を示す。Tukey 法の HSD 法（5%水準）による多重比較を行ったところ「授業を受講する前のドイツ歌曲への抵抗感」については第3クラスタ>第1クラスタ>第2クラスタ、「授業を15回受講した後のドイツ歌曲への抵

五

抗感」については第1クラスタ＝第3クラスタ＞第2クラスタという結果が得られた。

第1クラスタは「授業を受講する前のドイツ歌曲への抵抗感」「授業を15回受講した後のドイツ歌曲への抵抗感」とともに高く、ドイツ歌曲に対して抵抗感が高いと考えられるため「抵抗感高群」とした。第2クラスタは、「授業を受講する前のドイツ歌曲への抵抗感」「授業を15回受講した後のドイツ歌曲への抵抗感」とともに低く、ドイツ歌曲に対して抵抗感が低いと考えられるため「抵抗感低群」とした。第3クラスタは「授業を受講する前のドイツ歌曲への抵抗感」が高く「授業を15回受講した後のドイツ歌曲への抵抗感」が低いことから、授業を受講することによって抵抗感が低くなったことが考えられるため「抵抗感変化群」とした。

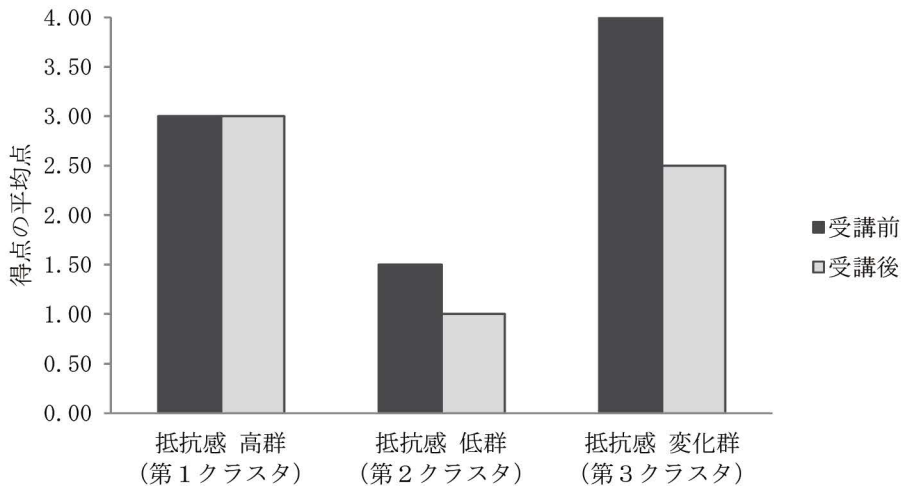


図1 3群の受講前後におけるドイツ歌曲への抵抗感得点

各群の抵抗感に関する理由は表2の通りである。受講前受講後ともに発音に関する記述が多かった。

抵抗感高群は、受講前後ともにドイツ歌曲の「難しさ」を理由として挙げたり、「言葉をたたせるのがむずかしい」「レガートに流れてくれない」など発音に関する困難さを理由として挙げたりしていた。

抵抗感低群は、受講前の抵抗感に関する理由においては、「フランス歌曲より素敵」や「もともとドイツ歌曲を勉強していたから」のような受講前からドイツ歌曲に対して好印象の理由が挙げられている一方、「子音をはっきり発音するのが苦手だから」「ドイツ語に難しいイメージがあったから」のようなドイツ歌曲に対する抵抗感が示されていた。しかし、受講後の抵抗感に関する理由においては、「母音の響きが少しつかめた」「子音をもっと頑張らなくてはいけなかった」となど発音の克服の実感や課題を見つけて克服したいという意欲が挙げられていた。

抵抗感変化群は、受講前の抵抗感について「ドイツ語というより、発音が苦手なため」「発音が分からないから」「発音と発音をしたときの声の出し方が難しい」のような発音の困難さを理由として挙げている。一方、受講後の抵抗感については「発音をもっとできるようにしたい」「発音の問題をもっと改善して歌えるようになったらさらに抵抗がなく…」のように発音の克服への意欲に関する内容が理由として挙げられていた。

表2 受講前後におけるドイツ歌曲への抵抗感に関する理由

群	対象者	受講する前の抵抗感に関する理由	受講後の抵抗感に関する理由
抵抗感 高群	1	・ 難しい ・ うまく発音できない	・ 難しい ・ 発音が難しい
	2	・ 言葉をたたせるのが難しい ・ 英語と似ている	・ レガートに流れてくれない
抵抗感 低群	3	・ フランス歌曲より素敵	
	4	・ もともとドイツ歌曲を勉強していたから	・ 授業を通して母音の響きが少しつかめた
	5	・ 子音をはっきり発音するのが苦手だから	・ ドイツ語になれてくると抵抗は少なくなった ・ 子音はもっと頑張らなくてはいけないと思った
	6	・ ドイツ語に難しいイメージがあったから	・ 素敵な曲にたくさん出会えたから
抵抗感 変化群	7	・ ドイツ語というより、発音が苦手なため	・ 発音をもっとできるようにしたい
	8	・ 発音が分からないから	
	9	・ 発音と発音をしたときの声の出し方が難しいのだろうと思っていたため	・ 発音の問題をもっと改善して歌えるようになったら さらに抵抗がなく、ドイツ歌曲に取り組めると思った
	10	・ すごく嫌い	・ ドイツ語を外部で披露するほどの自信はまだない

3-6 考察

(1) 授業前後におけるドイツ歌曲への抵抗感

授業前後の抵抗感に違いがあるか検討した結果、授業前よりも受講後の方が抵抗感が低いことが明らかとなった。このことは、「ドイツ歌曲研究2」の授業実践が学生のドイツ歌曲への抵抗感の低減に一定の効果をあげたことを示唆している。

七

(2) 授業前後におけるドイツ歌曲への抵抗感についての分類とその理由

次に、授業を受講する前後におけるドイツ歌曲への抵抗感の低減が生じた理由を明らかにするため、授業を受講する前後のドイツ歌曲への抵抗感についてクラスタ分析を行い、各群の特徴を明らかにした。その結果、学生のドイツ歌曲に対する抵抗感授業の受講前後におけるドイツ歌曲に対する抵抗感の抱き方について3群に分けることができた。各群ともに受講前のドイツ歌曲への抵抗感に対する理由については、発音に関する記述が多く散見されたことから、発音の仕方が受講生にとって高い壁となっている

ことが明確となった。しかし、受講後の抵抗感に対する理由については、抵抗感高群、抵抗感低群、抵抗感変化群それぞれ、特徴が見出された。

抵抗感高群は、受講後の抵抗感に関する理由において発音に関する困難さを挙げている。こうした理由が挙げられるのは、子音の重要性に気づいているものの習得の実感を持つことができず、もどかしい状態であるとも解釈することができる。一方で、「レガートに流れてくれない」のように単に困難さを訴えるだけではなく、困難な点が具体的になっていることが指摘できる。このように困難な点が具体的に気づくとその点についてトレーニングを集中的に行うことができるため非常に重要なことであると考えられる。よって抵抗感高群の学生に対しては、引き続き子音のトレーニングを行い、子音の発音を定着させて自信を持たせることが大きな課題となるだろう。抵抗感低群および変化群においては、発音に対する克服の実感や発音の克服に向けた意欲が理由として挙げられていた。こうした理由が挙げられるのは、学生自身が子音の発音を習得しつつあることを実感していること、さらに技術向上に努めたいという意欲がわいていると解釈することができる。よって、これらの群に関しては、引き続き子音のトレーニングを行うとともに、詩の内容に合わせた発音の仕方について考えさせるよう指導する必要があるだろう。

4 結論と今後の課題

本研究では、ドイツ歌曲に対する抵抗感を低減するために、子音のトレーニングを授業の冒頭に取り入れ、授業内容を総括するためにアンケート調査を実施し、ドイツ歌曲に対する学生の取り組み方や意識の変化について考察することを目的として検討した。その結果、子音のトレーニングを冒頭に取り入れ、さらにアンケート調査を実施することにより、学生のドイツ歌曲に対する抵抗感の低減を確認することができた。また、学生の発音に対する意識の変化を詳細に確認することもできた。こうした学生の変化を確認することは、教員が現在の学生の状態を知るのみならず学生も現在の自身の状態を知る機会になるため、技術の向上に大きな役割を果たすことが考えられる。今後は、詩の解釈に関する取り組みなども実施して、ドイツ歌曲における学生の表現力の向上に貢献したいと考える。

5 参考文献一覧

- (1) 應和恵子 1991年 「声楽における舞台語としての子音の発音」『大分大学教育学部研究紀要』第13巻2号 1－13ページ
- (2) クロイツァー涼子 2011年「芸術家を目指す声楽学生に効果的なイタリア・ドイツ系の発声法と歌唱法の研究」『有明教育芸術短期大学 紀要』第2巻 127－144ページ
- (3) 高折統 1988年 『歌唱のためのドイツ語発音法』音楽之友社
- (4) 田辺とおる 2015年 「フレーズ感・朗読・歌詞解釈から考察したドイツ歌曲／オペラ歌唱とその指導についての提言」『国立音楽大学研究紀要』第50巻 29－40ページ
- (5) 田辺とおる 2012年 「ドイツ語歌唱における、日本人歌手の母国語発音に因む諸問題－1－」『名古屋芸術大学研究紀要』第33巻 141－165ページ

- (6) フレデリック・フースラー、イヴォンヌ・ロッド・マーリング（著）須永義雄、大熊文子（訳）
1987年 『うたうこと 発声器官の肉体的特質——歌声のひみつを解くかぎ』 音楽之友社
- (7) 益田道昭 2010年 『よみがえるドイツリート of 響き——ドイツ歌曲における発音の実践——』 サーベル社
- (8) 三ヶ尻正 1998年 『歌うドイツ語ハンドブック——歌唱ドイツ語の発音と名曲選』 ショパン

執筆担当（1 馬場由香、2 馬場由香、3 今岡多恵、4 馬場由香・今岡多恵）